



W美熟女艦長  
トスケベ催眠  
慰安任務

タ○ア・グラデイス マ○ユウ・ラミアス



「おはようございます！艦長」  
「おはようございます!!」

慌てて壁際に寄り  
敬礼のポーズを取る。

「おはよう！みんな」

「ツカツカツカ…」

艦内をさっそうと歩く  
二人の女性。それに気づいた  
士官候補生たちに緊張が走る。→

「おはよう。」

「…あら、あなた…」

「え……？」

ふいにタリアが  
足を止める。

タリア・グラディス (34)  
一児の母でマリューとともに  
この艦の艦長を務める

マリュー・ラミアス (26)  
フィアンセと近々結婚予定







「敬礼が板についてきたわね。  
良い心がけよ」

「あ、ありがとうございます  
グレイデイス艦長！」

硬直したまま  
通り過ぎていく二人を見送る。  
姿が見えなくなつて  
ようやく張り詰めた空気が緩む。

「ビビったあ〜…」

いきなり声かけられるから

何かへマしたのかと…」

「でも、さすが艦長になる人は

オーラが違うよなあ」

「ああ、やっぱカツコイイよな〜」

俺もいつかあんな風になれたら…」

候補生たちにとつて

二人は憧れの的でもあつた。

そう、珍しいことに

宇宙を航海中のこの艦内において

二人の女性が組織を統括する艦長だつた。

その卓越した手腕と人望を買われ

一躍艦長に抜擢されたのである。

優秀な二人の女性艦長によつて  
組織はうまく機能していた。  
すべてが順調だつた。

しかし男ばかりの艦で  
女性がトツプというのを  
快く思わない者もいる。

中隊長の男も二人に  
不満を抱えている人間の二人だ。



「ちよつといいかしら?」

「な、なんでしよう  
ラミアス艦長」

「この報告書なんだけど  
何なの、これは?  
ミスだらけよ」

「え?そ、そんなはずは...」

「一体何年この仕事を  
やってるのかしら?  
全く:しつかり  
してちょうだい」

「す、すみません、  
すぐに修正します...」

優秀な彼女らであるがゆえに、  
他人にも完璧を  
求めてしまうのだろう。

こういつた  
小言は日常茶飯事だが  
今日に限って他の部下たちの前で...  
これに男はひどく腹を立てた。







男は考える。

(くそ…俺が今の地位に  
甘んじているのも  
あの二人のせいだ…)

能力で圧倒的な差をつけられ  
出世の道は完全に断たれた。  
あの二人さえいなければ…。

明らかかな逆恨みだが、  
あるものを手に入れてから  
押さえが効かなくなつた。

それは人間の常識を  
操作する超小型の洗脳装置である。

もちろんこれは捕まれば  
重い処罰が下される。  
れつきとした犯罪だ。

しかし試したいという欲求は  
日増しに大きくなり  
そして今日、それがついに  
爆発したのだつた。

他に誰もいないのを  
見計らつて声をかける。

「お二人とも、こんなところに  
いらつしやつたんですね。  
ちようどよかつた」

「あら、どうしたの？  
今日の仕事はもう終わったはずだけれど」  
「まだ何か用かしら？」

「いえ、ちよつと…  
これを見てももらえますか？」

「何なの？」  
「私達暇じゃないんだけど」

怪訝な雰囲気。

「少し見てくれる  
だけでいいんです。

お手間は取らせませんから…」

そう言うのと棒状の機器を  
二人の目の前に差し出す。

そして素早くサングラスを  
かけるとスイッチを入れた。



「カツ」

紫色の光が瞬き、  
その光を直視した二人が  
一瞬にして硬直する。

「えっ…?」

「あ…」

それは信じられないほど  
すんなりと二人の意識と自由を操った。

今の三人は都合の良い  
規則や常識を自由に  
刷り込むことができる状態だ

「よし…上手くいったぞ」

（訳あって私自身は手を下せないが、あとは  
仲間の船員達が上手くやってくれるだろう）

（くくく…明日が楽しみだ）







次の日  
男子トイレにて

「♪♪」  
鼻歌交じりに  
用を足す男性士官たち。

そこにカツカツ、とヒールの音が  
近づいてくる。その足音は  
どんどんと近づいて、  
とうとうトイレの中にまでやってきた。

「ラ、ラミアス艦長!?!」  
「グラデイス艦長!?!」  
「どうしたんですか、一体!?!」

突然男子トイレに現れた  
二人を見て、先に用を足していた  
男たちが驚きの声を上げる。

「ごめんなさいね、  
女子トイレが清掃中みたいで!?!」  
「こつちのトイレを  
使わせてもらえるかしら」

「えっ?えっ?…?」  
わけも分からず、  
慌ててチャックを閉め場所を空ける。

「これが男性用トイレ…  
本当に仕切りとか何もないのね」  
「でも男の人はいつも  
ここで用を足しているんでしょ」

「仕方ないわよ、マリユー」  
「女子トイレが使えないんですもの」  
「そうね…私達も立つてするしかないわね」

周りの男達が困惑している中、  
それを△常識▽と思いついでいる二人は  
自分たちの行為を一切疑っていない。

便器の前に立つとパンティを下ろす。  
そしてがに股になって腰を落とす。  
狙いを定める。











真横からも小便の音が鮮明に聞こえてくる。三人はどうしてもお互いが気になってしまう。

「イヤだわ、タリアが  
おしっこしてるの丸見え……  
音まで丸聞こえじゃないの……」

「男の人はこういうのかしら……？」  
「恥ずかしくないのかしら……？」

「マリユールだったら、あんな  
はしたないガニ股で  
オシッコして……アソコも  
見えちゃってるし……」

さりげなく互いの放尿姿をチラ見する。  
そして自分も同じだと気づき赤面する。









「おや、これはこれは  
ラミアス艦長に、グラディウス艦長。  
おはようございます！」

二人に催眠をかけた  
張本人の男だった。

「!!…あ、あら…あなたなの…  
「こんなところで、き、奇遇ね」

「いやあ、お二人と一緒に  
小便できるなんて光栄ですよ」  
「そ、そう…それは良かったわね…」  
「そういえば例の報告書の件ですが」  
「ゴメンナサイ、今ちよつと…  
手が離せないの」

二人とも今まさに用を足している最中なのだ。  
とても仕事の話などする余裕はない。

「いやあ、お二人ともすごい勢いですな  
随分溜まってらつしやるようで…」

「あつ、ちよつ、ちよつと…!?」  
「やだ、覗かないでちよつとだいつ」  
「ははは、そうは言いましたねえ  
見えてしまうんですよ」









「ジヨロロ、ジヨロ……、ロ……」

「ふん……ん」  
「ふう……う」

ようやく小便を出し終え、  
スツキリする。

しかし……で異変に気づく。

「はあ……あ……ア……ア……」

「ん、ん……ウン……」

おしつことは別の股間のぬめり……。  
二人は見られながらの放尿に  
少なからず興奮を覚えていた。

（ヤダ……濡れちゃってる……？  
なんで……？）

（私ったら何をドキドキ  
してるの、用を足したぐらいで……）

最後に軽く腰を振り卑を切ると  
二人は大急ぎでパンティを履いた。









今日は実に面白いものを見させてもらった。さてと、次はどんな催眠を……

そうだな、ひとつ見習い士官にけしかけてやるとするか。人一倍性欲の強そうな奴がいい。

二人にはそれにふさわしい衣装も用意しておいてやろう。

特別任務、頑張ってくださいね。艦長殿。



船員たちのマドンナ的存在、  
ラミアス艦長とグラデイス艦長。  
どちらも甲乙つけがたい美熟女だ。  
でもそれと同時に近寄りがたい  
オーラを放っていて、  
見習いの僕は馬車馬のように  
働かされる毎日で――。

「ちよつと  
そこあなた!!」

「は、はい?  
なんででしょうか、ラミアス艦長」



「今日の雑務はもう結構です。速やかに部屋に戻って待機しなさい」

「え。でもまだ仕事が残って……」

「これは艦長命令です！今夜は私が直々に見習い士官のあなたに演習を実施します。今のうちにしつかり体を休めておくように」

「え 演習!? それって一体……」

「馬鹿ねえ。それを話したら意味がないでしょう?」

「その際は私も同行することになってるのでそのつもりで」

「グラデイス艦長もですか……!?!」

「何か問題でも……?」

「いいえ! 分かりました……」

（二人が部屋に来るなんて…何か大変なことになつてきたな……）

そしてその夜——まさか美熟女艦長達が慰安任務で僕の部屋を訪ねてくるなんて……



「着替えに手間取って遅くなっちゃってしまい  
申し訳ありません！」

「今夜付で貴官の専属慰安娼婦に  
着任しましたマリユール・ラミアスです。」

艦長を一時退任し  
これより慰安任務に  
当たります。」

「同じくタリア・グラデイス  
艦長の任を退き貴官専用の

性処理係として奉仕  
することに専念いたします。  
どうぞご命令を♥」

「!?」

「な…な…  
二人ともなんてエロい格好!  
下の毛がはみ出て…  
それに腰のコンドーム…  
これは一体…!!」

「ああ…恥ずかしいですわ、  
そんなになまじいと  
ご覧にならないで♥  
これは上層部からのお達しで…」

「突然のことで驚かれるのも  
無理はありませんが、  
これも貴官に立派な将校に  
なつて頂くため…」

「私達はどんな破廉恥で  
スケベなご命令でも  
絶対服従いたします。  
ご要望があれば何なりと…  
どうぞ欲望のままで  
お申し付けくださいませ♥」







「ちよ…ちかつ…  
そんなにくつつつかれたら」

「どうしました…?  
初めてで緊張されてるのかしら？」

「肩の力を抜いて  
リラックスイテ  
くださいね♥」

「そ…そんなこと  
言ったって…  
あ…む胸が当たって  
ヤバっ…」

「あらあら♥  
フフ…♥」

「隠さなくてもよ  
ろしいのよ  
女性の体に反  
応してしまう  
のは自然なこ  
とですもの♥」

「あ…!」

「そう、遠慮なんてなさらないで…  
さきほども話したとおり今の私達は  
あなたより階級が下なんですよ…?」  
「ナデナデ…♥」

「ふ…太もも撫でられてる  
だけなのに…メチャクチャ  
気持ちいい…♥」

「せつかく気持ち良くして差し上げたいのに  
慰安任務がこなせませんわ  
このままでは私達が叱られてしまいます」

「だから…ねえ…  
お願い♥」

「甘ったるい声…」

「オバサン達に  
見せてエ…♥  
あなたの…  
おちんぼ♥♥」

「三人の吐息が  
耳に当たる…♥」







「うっ…あ  
すい…ら」

「ん…んふん♥  
レロっ…ん♥」

「ペロ…んはツ♥  
えるン…チユパっ♥」

「いつも命令ばかりの  
艦長が二人して跪いて  
僕のをしゃぶってる…♥」

むちゅっ♥

ちゅぽっ♥

「ああん…  
この歳でなんて  
ご立派なサイズ…♥  
あむ…  
チユツ…ルロツ♥」

「本当に…  
素晴らしいですわ  
さすが未来の将校様♥」

ふん♥

トロっ♥

「ああ…♥私  
お〇んこが疼いて  
もう辛抱できません」

「私もです…  
こんなたくましいものを  
見せられてはどうにか  
なつてしまいますわ♥」

「いかがなさいますか？  
将校様のご命令とあらば  
今すぐにも…♥」

「出産経験済みの  
年増オ〇ンコですがどうぞ  
将来のための練習台として  
ご活用くださいませ…♥」

チロっ♥

れろっ♥

あ♥

あ♥







「さあ、早くいらして♡」

「緊張しなくていいのよ  
ゆっくりでいいからね♡」

経験豊富な二人が青年を導く。  
最初は余裕ぶつていたが、  
しかしその立場はものの数分で  
逆転する。

一つには男が性豪であったこと。  
そして二人には感じやすく  
イキやすくなる暗示が  
かけてあったためである。

「……………♡」

「ああッ!?  
ウソ、どうしてこんなに…♡」

「おかしいわっ……  
こんなに感じるなんてエエ…♡  
おおおん♡」

ベッドの上で二人が喘ぎ叫んでも  
男は止まらない。



「あっ♡はあッ♡」

「はああんッ♡  
ステキ…♡イイのっ♡  
あなたのおちんぽ♡」

「初めてなのに  
こんな♡  
あうん…♡わ私…もう  
イっつてしまっ♡そう…♡」

ハッ♡  
ハッ♡

ハッ♡  
ハッ♡

「んフッ…♡  
おっ♡おオッ♡」

「待って…そんなに激しく  
突かれたら…♡  
ひん…♡こっちが先に  
参っちやうわアッ…♡」

「ダメになっちやうの…  
ダメ…もうもうっ…♡」

ズッ♡

ズッ♡

イッ♡  
て♡  
♡♡♡









あつという間に  
イカされてしまった二人↑。

ハァ...  
ハァ...♡

あ...あ...♡

あ...♡

ビク♡

ビク♡

ビク♡

ビク♡

しかしコンドームが  
なくなるまで任務は  
続いた.....









次の日の早朝

（昨晚の出来事は現実だったのだろうか……？）

（なんだか頭がボーッとする。  
まだ夢を見ているみたいだ……）

「ちよつと  
その君!!」

「は、はい?」



「通路の真ん中で何をボーっと突っ立ってるの？」

「ラ、ラミアス艦長……！いえ、あの、その……」



「まだ寝ぼけてるみたいね？顔を洗ってきたほうがいいんじゃないかしら」

「グラデイス艦長……すみません……えっと……」

（二人とも普段通り……？狐につままれたような気分だ……）

（ううん、誰かに話してもきつと信じてくれないだらうなあ……）

「さてと、私達も仕事に取り掛からなくっちゃ」

「道具と着替えるは更衣室にあるのよね？」

「ほら、早く行きなさい  
今日も仕事山積みなんだから」



「はい……」

「そのはずよ。さつさと着替えましょう。こんな格好じゃ仕事にならないわ」

「そうね」



更衣室から出てきた二人。

「か、艦長!?

「お、おはよう!」ぞいます…!」

「…おはよう!」

艦長と鉢合わせした部下たちが皆目を丸くする。

（もう、まただわ…!）

マリユーが堪らずスカートを引っ張る。

「ちよつと、マリユー?」

「そんなにスカートを引っ張らないの。変に思われちゃうわよ!」

タリアが小声でマリユーに注意する。

「だ、だつてえ…!」

マリユーが視線を気にするのも当然だった。



乳房がはみ出るほどの  
へそ出しノーリーブ、  
超ミニのスカート。

あまりにも過激で、  
誰もが足を止め  
その姿に見入ってしまう。

「そうやって隠すと  
かえって注目されちゃうわよ。  
大丈夫よ、いいつも通りに  
してれば……」

「そういうものかしら？  
：ねえ、せめてパンティだけでも  
普通の履き替ええない？」

「ええ？ダメよ、  
支給されたものを  
履くのが決まりでしょう？」

「それはそうだけども……  
でもこれ……毛が  
見えちゃってるのよ……？  
色も派手だし……」

「それぐらい見えたって、  
どうってこと……ないわよ。  
それに……」

「艦長なんだからパンティも  
すぐに識別できる派手な  
色でないで困るでしょう？  
それぐらい慣れないと……」

腰に手を当て  
虚勢を張るタリア。  
しかし内心はドキドキ  
しっぱなしだった。

こんな娼婦のような  
格好で恥ずかしいくない  
女性はいない。しくなく  
お硬いタリアなら  
なおのことだ。







「それよりほら…  
早く行くわよ」

二人が準備室へとやっってくる。

「おや、これはこれは艦長殿。  
おはようございませす」

「三 おはようございませす！」

そこには中隊長のほか  
3、4名の候補生が待機していた。

「あら…お、おはよう。  
みんな、今日は随分と早いのね」

「ええ、まあ。それよりお二人とも  
今日はどうされたんですか？  
とても涼しいお格好で……」

「え、ええ、前の格好じゃ  
仕事がいりづらかったから…  
少し手直ししてもらったの…」

「ふうむ、なるほど。  
ラミアス艦長はピンク、  
グラデイス艦長は青と…  
これなら遠くからでも  
下着の色がすぐ確認できますな」

「あ……」

その言葉に思わず  
スカートを押さえる二人。

「とてもお似合いですよ。

なあ、みんな？」

「え、は、はい！すごくその…」

「セクシーというか…」

「エロくて素晴らしいツス！」

怖いもの知らずなのか  
つい本音を口にする。

「な、何を言ってるの…！  
これはあくまでも仕事のためで…」

「そうよ、変な誤解  
しないように！」

それが組織の規則だと  
信じて疑わない二人は  
部下を叱りつけ、  
恥ずかしさを堪えつつ  
仕事に取り掛かる。



優秀な艦長達の重要な業務…  
それは艦内を雑巾がけすることである。く

「たまんねええつ、見るよ、あのケツ」  
「スカートの短いから丸見えだぜ」  
「パンツも小さいし」

とうとうそんな話し声まで  
聞こえてくる。

水を絞るときさつそく  
壁や机を拭き始める  
マリユーとタリア。

しかし少し体を  
動かしただけで  
徐々にスカートが  
捲れ上がってきてしまう。

（いやあん…  
スースーするわ…  
お尻出ちやつてる…わよね…  
どうしよう、さりげなく  
直そうかしら？でも…）

いくら直したところで  
またすぐに同じ結果に  
なるのは目に見えていた。  
後ろからの視線を  
ひしひし感じつつも  
そのまま掃除を  
続ける二人。

（うう…恥ずかしいけど  
隠したらよけい変に思われ  
ちやうし…）  
（これは仕事なんだから  
ど堂々としてなくちや…）  
などと考えていると







「いけませんなあ、艦長殿」  
男が声をかける。

「えっ？な、なんのことがしら？」  
「…なにか問題でも？」

「いえね、僭越ながら申し上げますと、  
お二人とも掃除のやり方が  
よろしくないかなと」

「女性が雑巾がけする時は  
もつとお尻を揺らさない  
といけません」

「…え？」

「おや、正しいやり方を  
ご存じない？博識な艦長殿なら  
当然知っているものかと…」

二人が顔を見合わせる。

「し、知ってるわよ。  
それぐらい。ただちよつと…  
忘れていただけよ」

「うっかりしてたわ、そうね、  
お掃除の時はお尻フリフリ  
するのが常識…よね」

「くく…ではお二人とも  
どうぞお続けになつて下さり」

「ええ、ご忠告感謝するわ。  
あなた達もそろそろ  
仕事に取り掛かってよ  
よろしくてよ」

「いえ、私達は後学のために  
ここで少しばかり優秀な  
艦長殿の働きぶりを  
見学させて頂こうかなと…」

「見学ですって!？」

「いけませんか？」

「いいえ、別に…  
構わないけど」

候補生たちを前に二人には  
それを断る明確な理由が  
思い浮かばなかった。









「お尻を振るって…  
一体どうやれば…」

「こんな感じ  
かしら…」

雑巾がけをしながら  
ゆつくりお尻を揺らす二人。

「おおっっ」

後ろからの小さな歓声に  
ドキツとする。

ぷりん♡  
ぷりん♡

「もうっ…  
ビツクリするじゃない」

「なにが「おおっっ」よ。  
私達は真面目に  
仕事してるのよ。  
変な声あげないでっ」

「ぷりんっ♡  
ぷりんっ♡」

「憤慨しつつも  
お尻を揺らす。」

ぽん♡  
ぽん♡

カマッ♡









「なるほど、とても  
勉強になりますなあ。  
お前達ももつと近くで  
艦長の仕事ぶりを  
目に焼き付けて  
おくように！」



部下をけしかけ、  
二人の周りに寄って来させる。

「ちよちよつと…近すぎよオ  
そんな近くで見るなんてえ…  
でも、頑張らなきゃ…」



「こ、これぐらいのことで  
恥ずかしがつてたら  
艦長として若い子達に  
示しがつかないわ…」

「もつとお尻を  
突き出して、お掃除に  
励む姿勢をしつかり  
見せないと…」

後ろに構うあまり乳首が  
出ていることにも気が回らず…

「オイ、見るよ、アレ」  
「うわ、マジかよ…」

二人は気づいていなかった。  
パンティが徐々に湿り気を  
帯びてきていることに。

「…?どうしたの、みんな…?」  
「騒がしいわねっ  
し、私語は慎みなさい！」

シミ付きパンティを晒しながら  
部下たちを叱りつけるのは  
見られたら興奮しているのは  
明白だった。二人だけが  
そのことに気づいていない。











数日後、特別任務の夜。

数人の男が取り囲まれ、モジモジする二人。襟元から下がばつさり取り払われた制服。さらにその下にナナカ水着を着用していた。

「へへ…二人ともすごい胸もお尻もデカすぎですよ。間近で見るとこれほどとは…」

「着痩せするタイプなんですかね。さすが艦長だけでなく慰安娼婦に任命されるだけのことはありますね」

周りの男たちが二人のお尻に手を伸ばす。

「あッっ…ちよつと…!」  
「き気安いわね…」

お尻を撫でられ、とつさに腰を引く。

「だ大体この格好はなんなの?」  
「いくら慰安任務だからってこんな…」

水着は以前のものとは違いブラにはハート型の穴が開けられパンツも小さくカツトされていた。

その上に襟元から下がばつさり取り払われた軍服。

モジモジしながら胸や股間を隠そうとするが、その豊富な体はとて隠しきれていない。

「…それに、どういうことなの?」  
「こんな大勢いるなんて…」

「そうよ、聞いてた話と違うじゃない」

「なにか問題でも?」

「も、問題は…ないわ。ないけれど、ただ…」

「私達にもその…心の準備が…」

「どんな状況も慰安任務を卒なくこなすのが艦長としての器量ですよ。でしよう?」

「…それは、そうだけど…」

「それでは手始めに軽く踊りなうか?」  
「頂きましようか?」



ダンスタイム♥

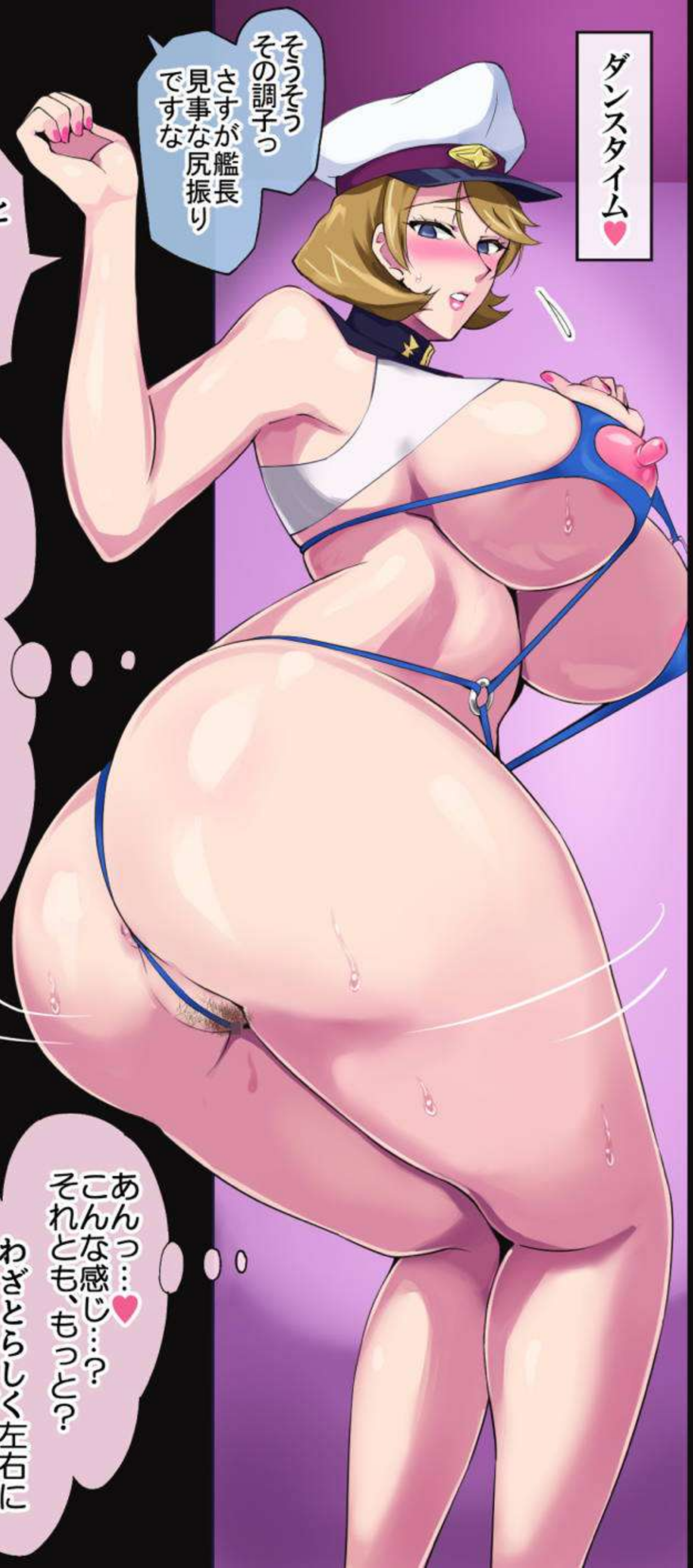
そうそう  
その調子っ  
さすが艦長  
見事な尻振り  
ですな

と  
当然よっ!  
これぐらい!

ウソよ  
本当はよ  
初めてなの  
でも艦長たるもの  
もつとエッチに  
ケツフリダンスして  
見せないっ!♥

フ  
フ  
フ

あんな感じっ!♥  
それとも、もっど?  
わざとらしく左右に  
振ったほうが  
いいのかしら...?









いい眺め  
ですよ  
二人とも

ハァー♡

足もっとの  
開くのオ?

キュウウん♡

ハァ♡  
ハァ♡

ううう…  
下から  
覗かないでえ

















「はあ、はあ…  
いいでしょ、もう、「いれぐらうど…」

「いやあ  
楽しませてもらいましたよ」  
「大丈夫ですか？」  
二人とも、すごい汗ですけど」

「え、ええ  
たくさん体を動かしたから…  
何か拭くものももらえるかしら？」

タオルを受け取り  
体を拭く二人

「ああ、全身汗でベツトリ。  
腋もこんなじ…えっ!!」

「見られていと思うと  
無性に体が熱くなるわ…あ!!」

二人はここでようやく気づく。  
自分たちの股間が汗以外のお露で濡れていることに

「やダ、夢中になつてて  
気づかなかつたわっ!。  
太ももまで垂れてるじゃない…」

「一体いつから…?  
踊っているときは濡れてなかつた…  
わよね?それとも…?」

「どうしました?艦長」

「え?」

「いいいいえ!  
なんでもないのよ」

「しっかり拭いておいたほうがいいですよ  
風邪でもひいたら大変ですからねえ」

「ええ、そう…ね…」

マリユールとタリアは  
股間の汗を特に念入りに拭き取った。

「ではそろそろ  
こちらのベッドへ…」

「……………」



「うう…」  
「…んん…いやあ…」

「もっとガバっと開いて  
よく見せてください」

「む無理よ、  
これ以上は…」

「すごいですね。  
紐が食い込んで  
毛がはみ出てますよ」

「それは、  
ああなたたちが…」

「こんなにカット  
しちゃうなんてひどいわ…」

「ところでさきほどから  
お二人のお股から  
なにやら栗のような  
ものが…」

「えっ!？」

「垂れているんですよ  
トロトロと…」

「う、嘘よッ  
そんなはずは…  
だってさつき拭き取っ…  
…ン、「ホン」

「なんです?」

「なんでもないわっ  
それより、いつまで  
こんな格好させて  
おくつもり?」

「そ、そうよ  
するなら早く…」

「そうですねえ」  
男が両側から  
ベッドに近づく。  
そしていきり立った  
イチモツを二人の顔に  
押し付けた。









「あぁっ……!!」  
「な、なにを……!!」

「お二人とも、割れ目を  
自分で広げて見せて  
くれませんか?」

「やだっ、なにこれえ……」  
「あ……あ、お、大きい……」

「ほら早く、  
指で開いて見せて!」

「……は……はい……い♡」

「クイっ……くぱア……」

「うわ、二人とも  
興奮しすぎですよ」  
「もうマン汁でベトベト  
じゃないですか。  
どんどん溢れて来てますよ」

「ちが、違うの  
これは♡」

「だって、こんなオチン……チン  
見せられたらあ……♡」









「いくら慰安任務だからってこんな濡らすなんて」

「せっかく撮影しようと思っただのにさすがにこれは家族に見せられないなあ」

「せっかくだから家族やフイアンセへのビデオメツセージを撮るうかと思っただんですが」

「ええ？こ、困るわ、そんなの…」

「なんでですか？お仕事中の二人を見ても良かったほうがいいでしょう」

「でも恥ずかしいじゃない。いくら慰安任務だからって…こんな…」

「こんな濡らしてたら本当のドスケベみたいですもんね」

「いやあん、言わないでえ…♡」

「それじゃ撮るのは顔だけにしましょうそれならいいですよわ？」

「そ、そうね…それだったら」

「絶対、首から下は撮らないですよ？」

「分かってますってそれじゃあ撮影はじめるーす」  
男が二人にカメラを向ける。



「あ、あなた？ ウィリアム？  
元気でやっってる？  
……ピデオレターなんて照れるわね  
地球での生活は変わりないかしら？  
こちらの航海は順調よ」

「ムウ……？ 見えるかしら？  
ずっと会えなかつたけど……  
あと一ヶ月ぐらいすれば  
会えると思うから……」



「その調子ですよ、二人とも。  
あ、こっちの声はあとでカットするんで  
どんどん話して下さい」

「ええ、でも……  
あとは何を話せば……？」

「仕事のことなんか話したらどうですか？  
今丁度お仕事ですし」

「そ、そうね……  
あの、今ちよつとお仕事中  
なんだけどもね、動画に  
撮ったらどうかってみんなが……」

「私達ね、今その……特別な任務を……  
守秘義務があるから、あまり  
詳しくは言えないんだけど……」

「そうなの、ちよつと  
下は見せられないんだけど……  
ねえ、これって本当に  
顔だけしか映ってないのよね？」

「大丈夫なんで安心して下さい。  
いくらお仕事とはいえ  
家族や婚約者にこんな  
乳首出しし卑猥な  
恥ずかしいでもんね？」

「ま、まあ、ね。  
息子も見ろわけだし……ね」

「そう言えばファミリア艦長は  
近々結婚されるそうで……  
旦那様に何かメッセージは？」

「え？ そ、そうね……ムウ？  
もうすぐ式をあげられるわね？  
私すごく楽しみにしてて……」







「あ、そろそろ挿れますね〜  
ゴム切らしてるんで  
生でもいいですよね?」

「えっ……っ、ちょよ、ちょよっど……」

「ヌプププ……」



「ハハ」

「ハ……ハ」

「二人とも表情が硬いですね。  
もつと笑って下さい」

「そ そんな事言っ たって……」

「ついでにピースなんて  
してみましようか」

「さあ  
グラデイス艦長もご一緒に」

「ええっ? 私もするの?」

「二人の腕を掴み強制的に  
ピースさせる。」

「はい、ピース」

その瞬間カメラが引き、  
彼女たちの全体を捕らえた。







「イエ〜〜〜イ」

「い、いえ〜〜〜い♡  
あなた、ウイリアム、  
見てるう〜〜〜?」

「ムウ♡♡結婚式  
楽しみにしてる  
からねえ♡♡♡」

「おや?なんだか体が  
小刻みに揺れてますね〜?  
大丈夫ですか?」

「だ、大丈夫よ  
でもちよつと寒いかしら?  
ねえ、タリアア?」

「そ、そうね、空調が  
壊れたのかしらね...?  
あとで整備士に  
言っておかなくちや...」

顔だけだから大丈夫...  
そう信じ込んでいる  
二人は口裏を合わせ、  
嘘の言い訳をでっち上げる。

「ムウ、私のことは心配しないで...♡  
こつちは上手くやってるから...」  
「ウイリアムっ、お母さんも  
頑張ってるからねっ♡  
あなたも学校のお勉強  
頑張るんですよ♡♡♡」







（さすが艦長、こんな状況でもギリギリ持ちこたえてるな）  
（なり、これならどうだ？）

「ズブツ、ズブツ、ズブツ」

男たちがさらにペースを上げる。

「ぐう…ン♡激し…♡ふうっ♡  
ふっ、あひいッ♡」

「ダメ…えっ、そんな突かれたら…  
はぐ…♡ほお♡おほおオ♡」

「ふぐウン…おほお♡

あ、あなたあ？  
な、なんでもないのよお〜♡  
おおっ♡チンポオ♡」

「ムウ、私、ほ、本当に  
なんでもない…から…ねエエ♡  
おお♡カリすごい♡  
えぐっ♡ゴリゴリ擦ってるう♡」

（暗示がかけてあるだけあって  
感度抜群だないや）  
もともとスケベなだけか？）

（とりあえず一発イカせてやるとするか。  
さーでどこまで耐えられるかな？）

「パン、パン、パン」

「はひいッ♡♡♡  
おっ♡お♡ン♡ほお♡」

「ひいン♡ふ、深い、届くうン♡  
私、もう…  
ダメ、それ以上されたらアア…♡」

「私も、もう限界…よっ♡  
カ、カメラ、止めて頂戴…  
一旦ストップよ、ストップ…!!」

しかしそんなことを言われて  
やめるわけもなく



「オラっ  
イケっ！」

突くのと同時に  
クリトリスを親指で弄る。

「ひぐ……!? そ、そこは……」

「グウウン!?  
ククリだめえええん♡」

「お♡お♡おおっ♡」

「プシュツ、プシヤアツ♡♡」

あつという間に昇り詰め、  
二人は同時に潮を吹いた。

「ツツツ♡♡♡」  
「グウウンっ♡♡♡」  
「ほグう——っ♡♡」

「イッてる、イッってる♡  
我慢してるけど  
アクメしてるところ  
バツチり映ってますよ  
二人とも♡」

（いい画が撮れたぜ  
このビデオ、なかなか  
高値で売れそうだ）







「ホラっ  
ちやんとまっすぐ立って  
カメラで撮ってたんだから」

「おおっ♡おおっ、おおん♡  
ほおおお…ン♡」

「ダメえっ♡下撮っちゃ…  
顔だけ、顔だけえええ♡♡」

「顔だけって。  
どつちみちそんな顔晒したら  
ヤってるのバレバレですよ」

「ほらほら、  
カメラのこと気にしてる  
余裕なんてあるのかなあ？」

「パン、パン、パンツ」

「おくうん♡  
奥っ、深いいっ♡」

「待ってえ♡そんな  
激しく突いたらああ…♡」

「おおっ  
お乳がユサユサ揺れて  
すごい迫力♡  
家族や恋人が見たら  
卒倒しそうだな」









「あああっ♡  
お、おちんぼ♡  
おちんぼイイ〜♡」

「いけませんねえ、タリア艦長とも  
あるうお方がそんな下品な言葉」

「マリユ一艦長も、  
これはあくまで  
慰安任務ですからね  
お二人が気持ち良くなつて  
どうするんですか？」

「わ、分かってるわっ  
ムウ、私感じてなんか…  
ないからねっ♡  
あなた以外のおちんぼで  
感じたりなんか…  
おっ♡ほおん…ぶっといの  
ゴリゴリきてるう♡♡」

「ウイリアム君見てる〜？  
タリアママは今日も  
お仕事頑張ってるぞ♡」

「そうよっ♡お母さん、お〇ん♡任務  
してるだけなのよ♡  
だから勘違い…しないでねえっ♡  
おっほおおん♡  
チンポチンポチンポ♡♡♡♡

「うう、締まるっ  
俺もうイキそうですよ」

「だ、だったら早くイってエ♡」

「ららんですか、このまま中〜♡」

「もちろんですよ♡  
慰安任務で部下のザーメンを  
受け止めるのは当然…  
膣出しを許可しますっ♡  
しない切り種付け射精  
しなさいっ♡♡」

「こっちもいきますよ、タリアママ？」

「だ、誰がママよ、

出すならさっさと出しなさいっ♡  
こっちはもう…  
準備できてるからア♡♡」

「いいんすか？

膣出しされたらすぐ  
イクように暗示をかけて  
ありますけど」

「え？あ、暗示って…？」

「二体なんのことオ…？」

「…あ、こっちの話です

それじゃ出しますよ  
二人ともっ」

「パンツ！パンツ！パンツ！」

「おおお♡ぐうん…♡」

「ああっ…くる、くるウ♡」











「ふー  
出した出した」

「大丈夫ですか？  
艦長殿」

「おっ♡おっ♡  
アヘエ…ん♡」

「今日はこれぐらいに  
しどきましようか  
続きはまた明日にでも…」

お…♡  
おっ♡

ゼン  
ゼン

ビク  
ビク

ゴポツ

「次はクチやケツ穴でも  
イケるように  
しどきますね〜」

「お…♡  
お…♡」

「ゴポツ…ドロオ」

「…はは、お○ん♡で  
返事してるよ」

ア…♡









それから一週間後――

男三人が通路を歩いていく。あたりをキョロキョロしながら他に誰もいないのを確認すると、そろりと目的のトイレに駆け込んだ。

中にいたのはマリユとタリアだった。彼女らの格好は襟元以外はほぼ全裸と言ってもよく、下着すらも履いていない。

しかし二人はその姿のまま、当然のようにトイレ掃除に励んでいた。





「あら？ あなた達…」

「ご、これはどうも、艦長。お疲れさまです」

「どうしたの？」

「わざわざ三人でトイレに来るなんて…」

「まさかサボリじゃないでしょうね？」

二人が眉間にシワを寄せる。

応対を間違えればお叱りを受けかねない雰囲気。









「いや、そうじゃなくて  
ですね…」

「……？」

「あのー、俺たち小便  
が溜まってて…」  
「こっちですぐに  
出したいんすけど…」

男が個室を指差す。  
その言葉を合図に、  
二人が笑みをこぼす。

「……あらあら。」

それならそうと早く  
言ってくればいいのに」

「我慢は体に毒よ。」

ほら、こっちへいらっしやい」  
個室へと誘導された男たちは  
そこでズボンを下ろす。

「あのー、蓋が閉まってるんですけど  
開けてもらってもいいですか」

「はいはい、今開けるわね」

二人は便器の上にもたれかかり、  
そして口を開け、  
れえつと舌を突き出した。



「はあい、オシッコど〜ぞ♡♡」

「うおお…!!」  
「あの、ほ、本当に  
出しているんスか?」

「もちろんよ  
ザーメンおしっこは  
お便女に出すのが  
マナーですよもの  
ねえ? タリア」

「その通りだわ。  
便女に出していいか、  
なんてあなた達  
おかしなこと聞くのね?」

「うはあ…:  
話には聞いてたけど  
マジですげえ」  
「ああ、半信半疑だったが  
まさか本当に…:」

「もう、  
何してるの、みんな?」  
「ほらア〜」  
「早くおちんぼシッコ  
しなさい♡」

艦長に促され、  
男たちがペニスを  
しごき始める。







「ハアア……ん♡  
すごいわね、ボーヤたち  
こんなにバキバキに勃起させて……♡」  
「本当ね、みんなすごく元気が……♡♡」  
とつても立派なオチンポ……♡♡」

「いつでも出して  
いいからね♡  
こぼさないようにしつかり  
穴を狙いなさア……♡♡」  
「出すときは……よ、マ……オ♡♡」

「ベロレロレロオ……♡  
エロエロエロお……♡♡」

ベロレロ♡  
えろえろオ～♡

「へへ、催促がすごいぜ  
このドスケベトイレ」

「ちようだい、君たちの  
ザーメンおしっこ♡  
タリアのおクチトイレにい♡」

「こつちにもかけてえ♡  
マリユ一の便器にも排泄お願い♡♡」

「それじやお言葉に甘えて……」  
「いきますよ、艦長……！」  
俺たちのザーメン  
全部受け止めてくださいなっ♡

「きてっ、きてえツツ♡♡」







「ビュクツ、ビュルツ、ドバァツ——!!」

「あぶあああ~~~~ツツ♥♥♥」

「あへえあ〜ン♥  
あは…あマア…♥」

「あふあん♥コラア♥  
ダメじゃなアいい、こんなに  
こぼしてエ…まあン♥」

「アハアアア♥すごいニオイ♥  
はあく♥へはあく♥」

「へああん、あったかい…♥  
ザーメンおしっこ  
気持ちイイ♥」

「ペロン♥レロオン♥  
あふあ…♥もつとかけてエ…♥  
最後の一滴まで、残らず  
お顔に絞り出してえ〜♥」

恍惚とした表情で  
排泄される快樂の余韻に浸る。

三人はこれからも熱心に  
仕事に励むことだろう。  
艦備え付けのザーメン  
処理専用便器として—。

完



